北海道医歌人会詠草

偶詠

帯広　中野　知弘

初夏を麻痺と失語の溢ち充てる棟に流るる緑
の眠り
猫愛し存りしひと世を骨壺にグルメ供へて声
顯つもなし
久方のひと日かえせと祈らばやヤヌスよ未だ
陽高からなくに
そは軛やぶれしものの反戦と平和と非核愚者
の船航く
涸れ川の堤に黄色く芍薬の花しをれゐて夏草
萌ゆる

無防備

札幌　山口　康徳

われこそは救世主なりと威張りたる
人畏れしや群衆ら散りゐる
天翔ける凶悪の声耳を搏ちそに誘はれし
未熟児哀し
都会の夜　妖気充ち満ち無防備の
人らいざなふ　地獄の底に
ｆｏｒｃｅ即正義なりきとうそぶきて
人殺めるも彼ら恥じざる
黒を白　云ひ包む奴　社会に多し
これが集はば　世界乱るる

寝待の山

札幌　魚住あらた

けふをしも夏深しとつと想ふつくづくたりき
女郎の花桔梗の花
けふをしも満天となり風ひかる居待月のけふ
茉莉花匂ふ
けふをしも水無月のけふつと想ふつくづくた
りき金魚売の声
けふをしも夏霧の山よとつと想ふつくづくた
りき寝待月の山
朝凪か夕凪かと想ひつ振りかえりみる空彩の
雲

最後の同期会

札幌　小国　孝徳

戦死せる十五名を含む五十名偲びて最後の黙
祷をする
若葉又青葉の陰に見え隠れ学部研究所数限り
なし
古き代の個性的なる建物の既に無し工学部予
科恵廸寮など
北狐も栗鼠もひそむとふ原始林今も構内の一
隅に在り
紙の前掛け下げてジンギスカン鍋突つく妻よ
り付合ひの長き友らと

雑文

札幌　古屋　統

稿料のなき雑文を投函す郵送料も自分持ちな
る
遠き日に籍を置きたるお役所のＯＢ交誌が稿
求め来る
若き日に学びし教室同門会先輩追記をワープ
ロに打つ
実態の把めぬ短歌の雑誌社が作品掲載の誘い
寄せ来る
凡俗の田舎歌詠みわれなれば「東京」の誘い
に少し傾くか